

## 『去来抄』解釈私論

——「岩鼻や」の句について——

土 屋 博 映

岩鼻<sup>四</sup>やこゝにもひとり月の客 去来

先師上洛の時、去来曰く「洒堂は此句を「月の猿」と申し侍れど、予は「客」勝りなん、と申す。いかゞ侍るや。」先師曰く「猿とは何事ぞ。汝、此句をいかにおもひて作せるや」。去来曰く「明月に乘じ山野吟歩し侍るに、岩頭又一人の騷客<sup>八</sup>を見付けたる」と申す。先師曰く「こゝにもひとり月の客と、己と名乗り出でたらんこそ、幾ばくの風流ならん。たゞ、自称<sup>〇</sup>の句となすべし。此句は我も珍重して『笈の小文』に書き入れける」となん。予が趣向は、猶二三等もくだり侍りなん。先師の意を以て見れば、少し狂者<sup>三</sup>の感も有るにや。

(退きて考ふるに、自称の句となして見れば、狂者の様もつかみて、はじめの句の趣向にまされる事十倍せり。誠<sup>一四</sup>に作者そのこゝろをしらざりけり。)

以上、日本古典文学大系66『連歌論集 俳論集』(岩波書店刊・木藤才藏・井本農「校注」)の本文による「岩鼻や」の句についての先師の評の一章である。ただし(一)内の部分は、筆者注に、「以下は頭書にしてあつて、『予が趣向は…』以下の別案と考えられるが、抹消していいないので、どちらを生かすつもりだったか不明である。よって、

参考のため掲げた」とあるので、本稿筆者が、それを重んじ、（一）内に収めたものである。

さて、『去来抄』のこの章は、当然のことながら、『俳論集』の一章であり、井本農一氏の校注がなされている。その注の中で、本論に関係あるものの注を掲げておく。注は、四・六・七・八・九・一〇・一二・一四の八つである。

#### 四・岩鼻やこ、にもひとり月の客

岩端。岩のはずれ。巖の先。「月の客」は月を賞でに出て来た人。この句『笈日記』その他に見えるが、芭蕉自撰の『三日月日記』（真蹟）には、「こ、にも月の客ひとり」とある。許六は「去来誅」に「月賞翫の第一」と激賞する。

#### 六・月の猿

人気ない岩端の月下の猿。古来の詩画に多い素材。

#### 七・山野吟歩し待るに

句を案じながら山野を歩き廻った折。

#### 八・騒客

詩人。自分ばかりでなくここにも月に浮かれ出た風流人があることよ、の気持。

#### 九・己と名乗り出でたらんこそ、幾ばくの風流ならん。

今夜の明月には月を賞でる人々が多いことだろうが、ここにも、この岩端にも、ひとり月を賞する風狂人、私が居りますよ、と自分から月に対して名乗り出る気持にした方が、どの位風流が深いことだろう。

#### 一〇・自称の句

自分から名乗り出る心持の句。

一二・狂者の感も有るにや。

(自分は初め気がつかなかったが) 風狂の士のおもかげも存しているようだ。

一四・誠に作者そのこゝろをしらざりけり。

自称の句とすれば風狂のおもかげが句にあらわれて来て、最初作者が考えた趣向より、ずっと趣が深くなる。全く自分が作者でありながら、句の真の意義を知らなかったことよ。

以上の注の中で、本稿で論じたいのは、九の注である。とくに、「自分から月に対して名乗り出る気持」(傍線本稿筆者)とある部分である。素朴な疑問として、古典文学作品において、月、あるいは星、太陽などに直接呼びかけるという表現が存在するのだろうか、またそうでなくても、そうやすやすと表現されるものであろうか、という思いが強いわきあがつてくるのである。

そこで、日本古典文学全集51『連歌論集・能楽論集・俳論集』(小学館刊・伊地知鐵男・表章・栗山理一校注)の該当部分の解釈をとりあげてみる。「俳論集」は栗山理一氏の校注であるが、該当部分の注はない。

先師は「ここにもひとり月の客として私がいるよ、と月に対して名乗り出たほうが、どれほど風流であるかもしれない。直接自分を詠んだ自称の句とするのがよい。この句は私も珍重して、笈の小文の中に書入れておいた」といわれた。(傍線本稿筆者)

右の解釈では、「月に対して」とあり、これは大系(日本古典文学大系のこと、以下大系と呼ぶ)の説とまったく同じである。

ところで、『去来抄』のこの一章について、大系の注と全集(日本古典文学全集のこと、以下全集と呼ぶ)の解釈に對し、この部分に関わる点を除いては、とくに異議を唱えることもない。だから、何故、突然、「自分から月に対し

て名乗り出る」(大系)とか、「月に対して名乗り出たほうが、」(全集)とかの、注なり解釈なりが出現するのか、わけがわからなくなるのである。

「不勉強であることを棚に上げるが、拙い本稿筆者の知識では、月に対して名乗り出る、言い変えれば、月に向かって呼びかけるというような表現は、古代語では存在しない、いやそうは言い切れないまでも、そうやすやすと用いられる表現ではないと、思われてしかたがないのである。

思いうかぶままに、「月」に関わる和歌をとりあげてみると、

月やあらぬ春や昔の春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして

(伊勢物語・四段)

わが心なくさめかねつ更級や

姨捨山に照る月を見て

(大和物語・一五六段)

このような和歌がうかんでくる。

これら二首は、いずれも月の美しい情景を背景としているが、月よ、おまえは、などと呼びかけたりしてはいない。

また、『竹取物語』において、月を見て涙したのは「かぐや姫」であるが、月に呼びかけたりはしない。「かぐや姫」ほど、月と関わり深い者は他にいないし、かつまた自己の悲しみの原因をなす月であるのに、月に訴えたりはしないのである。

また、『土佐日記』には、次のごとき阿部仲麻呂の和歌がある。

青海原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

月を見て故郷を偲ぶ、そんな和歌であるが、このような時にも、「月かも」と詠嘆するにすぎないのである。

古代人の発想の基本として、月は、詠嘆の対象とはなっても、呼びかけの対象とはならない、と考えられるのである。去来は、古代人とは言い切れないにしても、詩人であるから、この発想については同様と考えるのである。

さて、次に、「岩鼻やこ、にもひとり月の客」という一句につき、去来はどのように記述しているのか、それを考えてみたい。

岩鼻<sup>四</sup>やこ、にもひとり月の客　去来

四の注にあるごとく、「岩鼻」は「岩端。岩のはずれ。巖の先。」である。そして詠嘆の助詞「や」がついている。「月の客」は、「月を賞でに出て来た人。」とある。

先師上洛の時、去来曰く「洒堂は此句を「月の猿」と申し侍れど、予は「客」勝りなん、と申す。いかゞ侍るや。」

「洒堂は此句を「月の猿」と申し侍れど、」とは、洒堂がこの去来の句を、

岩鼻やこ、にもひとり月の猿

とする方がよいと言ったのである。「月の猿」については六の注に「人気ない岩端の月下の猿。古来の詩画に多い素材。」とある。それをふまえれば、「月の猿」と言い変えることにより、より風流心が増す、というのが洒堂の考えであつたのであろう。

それに対し、去来は「月の客」の方が、「月の猿」よりも勝っていると考え、ただしこの根拠は示されていないが、「先師」に、「いかゞ侍るや」と尋ねたのである。

先師曰く「猿とは何事ぞ。汝、此句をいかにおもひて作せるや」。

先師の答えは、「猿とは何事ぞ。」であつた。ここで酒堂の「月の猿」は、一蹴された。ただし、これも理由は示されていない。そして先師は、去来に対し、「汝、此句をいかにおもひて作せるや」と問ひかける。

去来曰く「明月に乘じ山野吟歩し侍るに、岩頭又一人の騷客を見付たる」と申す。

去来が先師に対して答えた内容は、まず「明月に乘じ山野吟歩し侍るに、」という、作句時の状況である。「明月に乘じ」とは、明月に浮かれて、ほどの意であろう。「山野吟歩し侍るに、」には七の注がある。それには「句を案じながら山野を歩き廻つた折。」とある。

次に、「岩頭又一人の騷客を見付けたる」と、作句の発端となつた事実が記される。八の注によれば、「騷客を見付けたる」は、「詩人。自分ばかりでなくここにも月に浮かれ出た風流人があることよ、の気持。」ということである。これは正しいとらえ方である。

去来こと、自分は、「明月に乘じ山野吟歩し」た風流人・俳人である。ところが月に浮かれ出た風流人は自分ばかりでなく、もう一人いた、という仲間を発見した感動がこめられていて、「こゝにも」の「も」が正しくおさえられているのである。

去来の句のとらえ方は、それなりにまとまりを持っているのであるが、「先師」はさらにダイナミックな観点から、この句を把握しようとする。

先師曰く「こゝにもひとり月の客と、己と名乗り出でたらんこそ、幾ばくの風流ならん。たゞ、自称の句となすべし。此句は我も珍重して『笈の小文』に書き入れける」となん。

先師の見解は、「こゝにもひとり月の客」であつた。つまり先師自身は、去来の句の形、外見を変えようとは思わないのである。形はそのまま、作句時の気持を重視しようとするのである。

「己<sup>九</sup>と名乗り出でたらんこそ、幾ばくの風流ならん」と先師は言う。九の注には次のように記されている。

「今夜の明月には月を賞でる人々が多いことだろうが、ここにも、この岩端にも、ひとり月を賞する風流人、私が居りますよ、と自分から月に対して名乗り出る氣持にした方が、どの位風流が深いことだろう。」

この注について、いささか考察を加えてみたい。

まず、「今夜の明月には月を賞でる人々が多いことだろうが」であるが、この部分は、またこれに続く部分も含め、注の形をとってはいいるが、解釈である。しかし、このような解釈が何故におこりうるのか、本稿筆者には判然としない。確かに言えて言えなくはない。実際に「今夜の明月には月を賞でる人々が多い」のは事実であろう。だが、解釈というものは、前後の表現を的確におさえ、許されうる範囲内でとどめるべきであると思う。

極論すれば、「今夜の明月にかかわらず、月を賞でず、眠る人々も多いことだろうが」という言い方も、同じ価値をもつて言うのである。

言えて言えなくはない解釈であるが、言えれば言えるから、そのように解釈したというのでは、本文に重きをおかないと批判されてもやむをえないということになる。

このような解釈に至った校注者の意図はくみとろうと思えば、実はくみとれないこともない。

それは句の中の「こ、にもひとり」の係助詞「も」の存在が原因となっているのである。

「こ、にも」の「も」は、列挙を示す「も」である。その「も」がこの句のように一つを示すのみであれば、他を類推する効果も出てくる。「こ、にもひとり」が、去来を指し示すならば、では類推される他のものは何であるかということになるのは思考の流れとして当然である。

そこで、「今夜の明月には月を賞でる人々が多いことだろうが」と、不特定多数の人物を想定するに至ったのである。意図はくみとれても、この解釈は主観的である。俳諧の世界ではこのような鑑賞がなされると言われてしまえ

ば返す言葉はないが、それならばそれで、鑑賞として明確に示された方がよかつたのではないだろうか。

言えれば言えるというような偶然的な解釈ではなく、こうでなければならぬ、という必然的な解釈でなければならぬのではないだろうか。散文といえど俳文と言えど、いやくも対象が文であるならば、そのような姿勢でなくては、時間や空間を超えた、本当の作者の精神に迫ることはできないと思うのである。

次に、「ここにも、この岩端にも、ひとり月を賞する風流人、私が居りますよ、」と記されている。「ここにも」「この岩端にも」ととることはここでは若干の疑問を投げかけておくにとどめるが、問題は続く部分である。

「自分から月に対して名乗り出る気持にした方が、どの位風流が深いことだろう。」とある。「どの位風流が深いことだろう。」は「幾ばくの風流ならん」に対応するものとして、これは問題ない。しかし、その前の、「自分から月に対して名乗り出る気持にした方が、」とはどういうことであろう。

本稿筆者は、既に、月に対して名乗り出る、言い変えれば、呼びかけるような表現がはたして存在するののかという素朴な疑問を述べている。それを不勉強と百歩譲ってみても、はたしてここで「月に対して名乗り出る」という解釈は正当性を持ち得るであろうか。

この部分を正しく把握する手がかりは、実は前後の表現、文脈、にしか許されないものである。

明月に乘じ山野吟歩し侍るに、岩頭又一人の騷客を見付けたる。

この、去来の、作句時の心情を重んじなければ、「先師」の言葉も正確に把握することはできないと思うのである。

去来作句時の情況は次のように分析できる。

去来が——明月に乘じ山野吟歩し侍るトキ

去来が——岩頭ニ、又一人の騷客を、見付けタ



それに対し、先師は、

去来が——こ、にもひとりの月の客と、己と名乗り出でたらんコト

と言つていて、それこそが風流だと言うのである。こゝう見てくれば、「名乗り出でたらん」の対象は自ずと確定できるものである。詳しくは後述するとして、次の表現にうつることにする。

ただ自称の句となすべし。

「自称の句」について、一〇の注では、「自分から名乗り出る心持の句」とあり、これは問題ない。

此句は我も珍重して『笈の小文』に書き入れける」となん

ここでは、「先師」が去来の句を珍重した、それがわかればよい。

予が趣向は、猶二三等もくだり侍りなん。先師の意を以て見れば、少し狂者の感も有るにや。

「狂者」については、一二の注に「(自分は初め気がつかなかつたが)風狂の士のおもかげも存しているようだ。」とある。ここでは、去来が「先師」の見解をすばらしいものと認めているのである。

以下、(一)内の部分である。

退きて考ふるに、自称の句となして見れば、狂者の様もうかみて、はじめの句の趣向にまされる事十倍せり。

これは、直前に述べられたのと同様の内容であり、「先師」の見解を去来が認めているのである。

一四 誠に作者そのこゝろをしらざりけり。

一四の注には「自称の句とすれば風狂のおもかげが句にあらわれて来て、最初作者が考えた趣向より、ずっと趣向が深くなる。全く自分が作者でありながら、句の真の意義を知らなかったことよ」と記されている。これも一応問題はない。

以上考察を加えてきたことにより、疑問がとくに残る注は、八と九ということになるのである。

全集の注は見るべきものは少ない。ただ、「岩鼻や」の句について、「明月を賞しながら遊歩する人は多いが、この岩頭にいる私もその一人だ、の意」となっていて、これはほとんど大系の注と同じである。

次に、『総釈去来の俳論（下）』（風間書房刊・南信一）の「七 去来抄」の〔評〕を抄出しておく。

「去来はあとで、師の言葉の真意をつくづく考えて見た。両句共「岩鼻」に焦点をあわせて明月を楽しむ人間を活写している点、「ここにも」の「も」が正に句眼である点は同じであるが、他称の句とすると、山野を逍遙する中に岩頭にはからずも見つけた、いわば傍観的にとらえた「月の客」となるに對し、自称の句とすると、自分はすでに岩頭にあり、近づき来る人と呼ばれていることとなつて、明月に痴れ狂じた「月の客」としての自分が描かれ、興趣は一段と深いものとなる。前者は岩鼻の他人を描く事によつて自分が描かれ、後者は岩鼻の自分を描くことによつて他人をも描かれる。」（傍線本稿筆者）

これによれば、「近づき来る人と呼ばれていることとなつて」と、明確に他人に呼びかけることとなされている。大系や全集よりも、よりよい解説である。ただし、まだ納得がいかないところがある。それは、「自分はすでに岩頭にあり」とか、「後者は岩鼻の自分を描くことによつて他人をも描かれる。」などと、作者である去来が、「岩鼻」にいるという点である。それは作句時の、情況また事実を曲げたものである。

文学的虚構というものも、実際には存在するわけで、また時にはそれが必要なわけであるが、作者の立場を無視して、作者以外の人間が、作者の存在していた位置までも変えることが許されるのであろうか。

明月や池をめぐりて夜もすがら

菜の花や月は東に日は西に

思いつくまに有名な句を二つあげてみたが、「名月や」「菜の花や」は、それぞれ、「名月」「菜の花」という対象に「や」をつけて詠嘆している。

初めの句は、「名月」の美しい情景での「池をめぐりて夜もすがら」であり、二番目の句は、「菜の花」の美しい情景での「月は東に日は西に」ということであろう。では、

岩鼻やこゝにもひとり月の客

この問題となっている句も、それにならえば、「岩鼻」という、月の美しい、場所での「こゝにもひとり月の客」と、素直に考えてよいのではないか。この際、作者、去来が「岩鼻」にいるかいないかということは問題ではないと思う。重要なのは「岩鼻」の見える場面にいるということであって、それ以上のものでもないし、それ以下でもない。

さて、ここで、問題となっている一章の表現を的確におさえて、自分なりの結論を導いてみたい。

四  
岩鼻やこゝにもひとり月の客 去来

「岩鼻や」は大系の注のとおり「岩端」であり、そこでの感激を述べている。「岩端」があり、明月下のそれであることが、後の文からも明らかである。

「こゝにも、ひとり月の客」は、去来の気持では、「こゝにも、私と同様に月を賞でる風流人がいるよ」ということであつた。そこから、「こゝ」が「岩頭」であることは言うまでもなく、「ひとり」は、去来以外の風流人である。ここで句に活力を与えるのは、「こゝにも」の「も」である。これは、私という月を賞でる風流人の存在が前提となつて、はじめて用いられる言葉である。

先師上洛の時、去来曰く「洒堂は此句を「月の猿」と申し侍れど、予は「客」勝りなん、と申す。いかゞ侍るや。」

「先師」の上洛時に、去来はかねてからの疑問を呈示した。そこで、「洒堂」たるものが、去来の句を

岩鼻やこ、にもひとり月の猿

と変えることを主張したことがわかる。大系の注には、岩端の月下の猿は、古来の詩画に多い素材であるという。これをふまえたとすれば、洒堂の考えもわからないではない。「月の猿」と表現することにより、古来の詩画が思い浮かべられ、句が重層的にとらえられるからであり、月を賞でる「客」を「猿」ととらえるならば、より風流人、風狂人としての存在が重きを持つからである。

しかし、去来はあくまでも、

岩鼻やこ、にもひとり月の客

を主張した。ここで、何故、「月の猿」よりも「月の客」の方が勝るのか、理由は示されていない。これは単に表現、それもすこぶる表面上の、語のイメージなり、響きなりを考えているだけなのかもしれない。

先師曰く「猿とは何事ぞ。汝、此句をいかにおもひて作せるや」。

「先師」は、「猿とは何事ぞ。」と言っている。既述のごとく、洒堂の「月の猿」説は、ここで一蹴されたわけである。そして、去来に作句の真意を問い返す。

去来曰く「明月に乘じ山野吟歩し侍るに、岩頭又一人の騷客を見付けたる」と申す。

この去来の答えは非常に重要である。作句時の、作者の心情が述べられているのはこの部分だけであるからである。「岩鼻や」の句を正しくとらえるには、この部分をいいかげんにとりあつかってはならないのである。

これも既述のことであるが、「去来が、明月に乘じ山野吟歩し侍る」時に、「去来が、岩頭に、又一人の騷客を見付けたる」のである。この時の情況、つまり去来の行動と、さらに、去来の、「又一人の騷客」との位置関係が重要である。しかも、これは、絵に描くことができるほど明確な行動であり、かつ位置関係となっている。

さて、それに対する「先師」の答えに注目してみよう。

「こゝにもひとり月の客と、己と名乗り出でたらんこそ、幾ばくの風流ならん。たゞ<sup>一〇</sup>自称の句となすべし。此句は我も珍重して『笈の小文』に書入れける。」となん。

「こゝにもひとり月の客」という表現は、去来に同じ。つまり、「先師」も、

岩鼻やこゝにもひとり月の客

をよしとした。去来の句の形を認めたのである。ただし、形は認めたのであるが、そのとらえ方が異なっている。

「己と名乗り出でたらんこそ、幾ばくの風流ならん。」と先師は述べている。

この一文を解釈してみると、「こゝにも一人月を賞でる風流人がいますよと、自分から名乗り出たことにするならば、どれほど風流心が増すことであらうか」くらいになるであらう。

この解釈で、問題になるのが、「こゝ」はどこなのか、「名乗り出た」のは、何に對してか、という二点であり、本稿の問題点でもある。

ここで注意したいのは、「先師」は、この作句時における、場面そのものについては何も否定していないのである。

つまり、

去来が——明月に乘じ山野吟歩し

という情況と、

去来が——岩頭に又一人の騷客を見付けたる

という行動は変わらないことになる。禅問答でないとすれば、位置関係も変わらないと見るのが素直であり、論理的なとらえ方ということにはならないだろう。

そうだとすれば、「こゝにも」の「こゝ」は、岩頭にいる騷客に對し、去来の現在位置を指示するのであり、「名

乗り出た」のは、その騷客に向かつて名乗り出たと見るのが妥当であろう。

この「岩鼻や」の一章は、一般に流布している有名なものである。その影響力を考えると、いいかげんな注や解釈は許されないのである。

もしも、本稿筆者の、客観的な解釈が、誤りだとするならば、俳諧はあまりにも芸術的なもので、軽々しく一般に流布されるべきものではないということになる。

ふりかえって、「月に向かつて名乗り出た」とするがごとき解釈は、大系<sup>が</sup>の注にあるように、「去来誄」に「月賞翫の第一」と、評してあるところからおこったものであろう。しかし、別に月に名乗らずとも、月賞翫の和歌や俳諧が作れることは、筆者のあげた少ない例からも明らかなのである。

本稿は、跡見学園短期大学の平成二年度国内研修員として筑波大学に国内留学した折、研究の一環としてまとめたものを、学習院短大の諸先生方の御厚意でのせていただいたものである。